

美とわざとのハーモニー
特別展 **19世紀末ヨーロッパの捺染布**
亀井茲明コレクション

主催 渋谷区立松濤美術館 社団法人 霞 会 館



バラと菊とのバリエーション

昭和60年

昭和61年

12月24日(火)～2月2日(日)

会場 主陳列室 (B1)

講演会

- 1月11日(土) 午後2:00

「ヨーロッパ19世紀の染織—技術と意匠—」 共立女子大学教授 北村 哲郎氏

- 1月25日(土) 午後2:00

「19世紀ヨーロッパの服飾」

文化女子大学教授 石山 彰氏

渋谷区立松濤美術館

捺染小史

捺染布とは、「なせん」、プリント布ともいい、あらゆる種類の布の上に色料を直接塗る、摺る、あるいは押捺して模様づけしたものを意味します。

捺染布は、紀元前2000年頃にはすでにコーカサス地方で作られており、手描染や捺染による布地装飾の技術は非常に古くから行なわれていたと考えられます。

12世紀になってはじめて、綿花・綿糸・綿布がスペインとイタリアの海辺の町を通して東地中海から西ヨーロッパへはいつてきました。

1498年、バスコ・ダ・ガマが喜望峰をまわり、インドに到着、直接交易の路を開き、ヨーロッパに大航海時代がはじまりました。17世紀になると、各国に東インド会社が設立され、ヨーロッパで求められていた香辛料・銀・銅などとともに、美しい染織品が本国に持ち帰られます。とりわけ、軽くて柔らかく、暖かな綿布に美しい彩色の施された、しかも洗濯も可能な華やかな「チンツ」^{イミテーション}とも呼ばれたインド更紗は、宮廷・貴族の間で愛好されました。それらの需要が追いつかないため、その模造品を作る試みが早速各地ではじまり、その結果、ヨーロッパの捺染技術は飛躍的な進歩をとげました。

しかし、更紗の人気が高まると、木綿輸入量増大による外貨不足や、国内の毛織物・絹織物業者からの圧力がかかり、ヨーロッパ各地で輸入制限や禁止などの国内産業保護政策がとられるようになります。やむなく、染織法を習得していた熟練工達は職を求めて各国に散ることになりました。しかし、このことによりかえって各地に本格的な染色工場が生まれる結果になったのです。そればかりか「禁止されたもの」の流行はとどまるところを知らず、かえって模様染めの綿布は18世紀の初めには一般的なものとなりました。やがて各国政府はこうした政策の無意味さをさとって禁令解除の方針をとり、工場も復興します。のちに「王立工場」の名称をうけたオーベルキャンプのジュイの工場（フランス）もこの頃に開設されたものです。

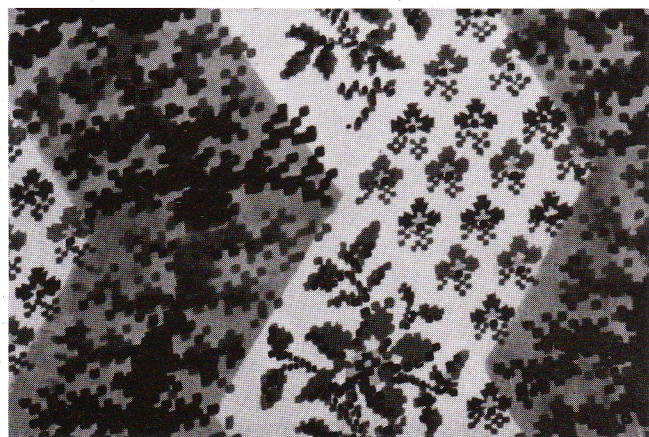
18世紀、綿布の需要が増大し、その大量生産が産業界の課題となり、その結果、紡績の機械化が図られ大量の綿布が安価に製造されるようになります。このイギリスにはじまった技術革新は産業革命という大きな波となってヨーロッパをつつみこみました。つづいて銅版を用いた捺染法が完成し、細かい柄や繊細な絵画的文様表現が可能にな



① ボーダー風の草花模様



② 草花模様



③ モザイク風ジグザク模様

りました。また、1783年には染織界における革命ともいえるローラー捺染機が発明され、一日の生産量をそれまでの百倍にも増やしました。

同時に新しい化学防染剤・拔染剤や新方法の開発もすすめられ、1856年にパーキンによって合成染料が発見されると、次第に染めの色調をあらゆる拘束から解放してゆきました。

生産力・紡績技術・捺染法の著しい向上と新しい染料の発見を背景に、染織のデザインは人々の関心をそそり、重要視されるようになります。デザイナー達の、ペイズリーやリボン、ロココ・ゴシック・古典的要素を折衷・融合・模倣した「様式への挑戦」は限度を知らず、各工房は創意にあふれたさまざまな作品を生み出しました。

このように、19世紀のヨーロッパは、技術的な改革と意匠の巧みさで、今日のプリントデザインの基礎を築き上げました。

これらの布地はプティ・ブルジョワの窓辺のカーテンに、寝台カバーに女性のドレスに新鮮な色彩をもたらしました。

本展出品の捺染布は、19世紀末（明治中期）にドイツに留学した亀井茲明伯爵（旧津和野藩主嗣子）が現地で蒐集された染織を中心とする図案コレクション（現在、東京大学附属図書館所蔵）から選んだものです。おそらく、亀井伯爵はその色彩の豊かさとデザインの自由奔放さに感激というよりむしろ驚きにも近い気持ちで蒐集されたことでしょう。

また文化学園服飾博物館所蔵の当時の服飾もあわせて紹介いたします。

今回の陳列をとおして、皆様に活力あふれたヨーロッパ染織界の息吹きを感じとっていただけるものと思います。



④ 撫子の花模様



⑤ 窓の中のバラ模様

▶ 織物風の模様

① インドの北部・カシミール地方の伝統的織物であるカシミヤ織風な花模様。

② 日本人にもなじみのふかい（みずみず）絨調。

③ 刺繍やモザイクをおもわせるデザイン。

▶ 単彩調④

デザイナーは量産時代をむかえ、コストの低い、色数が少なく、しかも人々に喜ばれる模様の創作にはげみました。

▶ バラのモチーフ⑤

バラは愛と喜び、美と純潔を象徴するものとして人々に愛され、ギリシアの昔から多くの伝承を生み出しました。

▶ ペイズリー⑥

涙のしずくにも似たペイズリー模様は、インド・ペルシアから生まれ、東西両洋で今なおひろく流行し続けています。



⑥ ペイズリーの各種バリエーション

〔美術相談〕

専門知識と経験豊富な美術作家を招き、みなさまの文化活動の援助になればと美術（制作）相談室を開設します。

●相談内容

洋画・日本画を中心にみなさまの制作作品を見て、相談指導をします。また美術史・美術図書などの相談もお受けします。

●相談日・相談美術作家

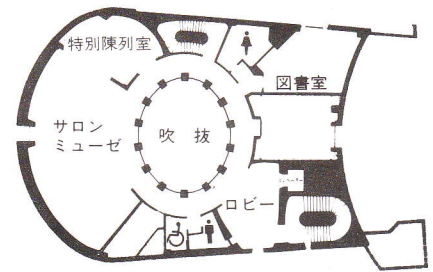
・1月15日(日)午後1:00～4:00

洋画家・遠藤原三氏 / 日本画家・荒井朝吉氏

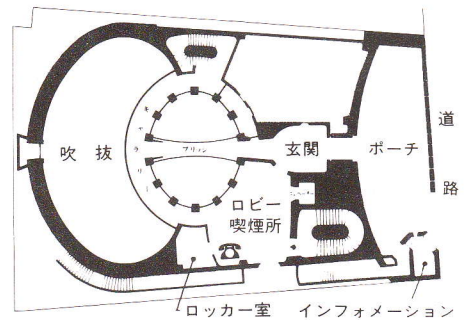
●申込方法

事前に電話で相談内容を申し込みください。

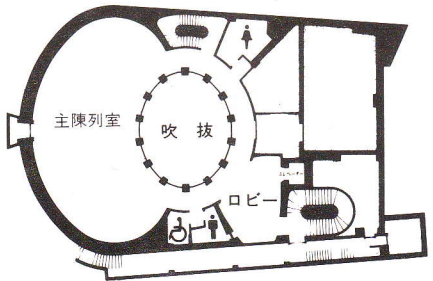
2階



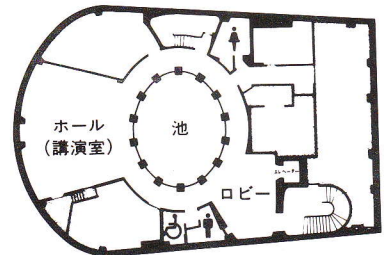
1階



地下1階



地下2階



〔美術映画会〕

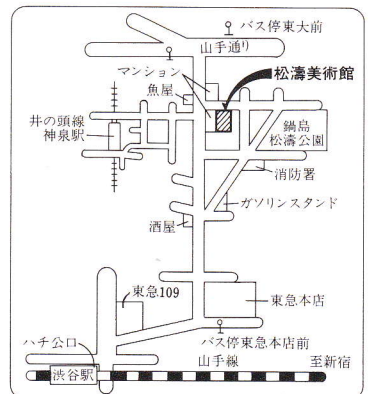
美術に関する映画フィルムを用意して、映画会を開催します。どうぞ気軽に御参加ください。

・1月26日(日)午後2:00～3:00

「19世紀の浪漫衣裳」

「プレインカの染織」

「森口華弘と京友禅」



会 期 昭和60年12月24日(火)～昭和61年2月2日(日)

休 館 日 年末年始 12月29日(日)～1月3日(金)

1月6日(月)、12日(日)、16日(木)、20日(月)、27日(月)

開館時間 午後9時～午後5時(ただし、入館は4時30分)

入 館 料 一般200円(160)・小中学生100円(80円)

※()内は団体20名以上